



# 星のその先へ



芳田尚哉

今日も暑いな……。

布団の上に寝かされながら、ぼんやりと天井を見る。

もによもによと手足を動かす。

動きたいけど、これしか動かせないんだよね……。

なにせ、俺は生まれてまだちょっとしか経ってないわけだし。

くいくいと首を動かしていると、ばあばが顔を覗き込んでくる。

どうしたの……と言っているの、笑ってあげた。

俺にできるのはこれくらいだ。笑うか泣くか。それだけ。

言葉はわかってるんだけど、どうすれば声に出せるのかわからない。

ああ、ああ、となんとなくの声が出るだけ。これじゃ伝わらない。

それでも、お腹が空いたら泣けばいいんだ。そうじゃなくても、泣けば抱っこしてもらえる。

ずっと寝てるのは退屈だから、こうして違う景色を見れるのは楽しい。

それにしても暑いな……。

テレビとかいう変なのからは、今日も猛暑日で、熱中症と思われる症状で救急車で運ばれる人が相次いでいますーなんて言っている。

それがなんなのかわからないけど、暑いんだよね……。

汗で体がべとべとになる。

着替えさせて欲しくて泣くと、ばあばは涼しい風を吹き出す機械をつける。クーラーっていうらしい。

これは気持ちいいな……。でも、これって冷たいんだよね。

ばあばにはちょうどいいかもだけど、俺にはちょっと寒いんだよね。

ばあばは、タオルケットをかけてくれる。

これでなんとか……。でも、ちょっとだけ寒いかも。

それでも、暑いよりはいいかな……。

でもやっぱり寒いや。

ぎゃあぎゃあ泣いてみる。

そうすると、どうしたの……って抱っこしてくれる。

抱っこされると、あったかいんだよね……。

ゆらゆらされると、眠くなってくる。

ふあああ。

眠くなってきちゃった。

おやすみなさい。

すやすや眠っていても、やっぱりお腹は空くんだよね。

きっかりお腹の時間通りに目が覚める。

ぎゃあぎゃあ泣くと、ばあばが俺のミルクを作ってくれる。

他のものを知らないから、これが一番おいしいんだ。これさえあれば満足。

ちゅぱちゅぱとミルクを飲む。

この時は幸せ～。

お腹が空いてるから、ごくごく飲みたいけど、ちょっとずつしか出てこないんだよね……。

あっ。

途中でちゅぱっと外される。

ぎゃあぎゃあ泣くと、もう一度ミルクをくれる。

ごくごくとミルクを飲む。

……飲んでみると、なくなってしまう。

はいおしまい、とばあばが言う。

俺はもっと欲しいのに……。まだ足りないよ。

そう思って泣くけど、ばあばはもうくれない。

しょうがない。これで満足しておこう。

それなりに満腹だし。

背中をとんとんされ、ごべえっとゲップが出る。

カエルさんとか言われても、俺はそのカエルさんっていうのがわからない。

でもいいや。

なんだか面白いし。

お腹もいっぱい、超ご機嫌。

きゃっきゃ遊んでいると、うとうとと眠くなってきちゃった。

う～ん、また寝よう。

☆☆☆☆☆☆

暗くなってきちゃった。

ママとパパの声がする。

お腹空いたよ……。

ぎゃあぎゃあ泣くと、今度はママがミルクをくれる。

ごくごく飲んで、げぼえとすると、服を全部脱がされちゃう。

お風呂だ。

あそこって、ぷかぷかしてて気持ちいいんだよね。

ぬくぬく～。

ぬくぬくした後は、眠くなっちゃうんだよね。

気持ちいいな……。

くてえと眠ってしまう。

☆☆☆☆☆☆

寒いよ。

ぐがぐがとパパがうるさいけど、それよりも寒いよ。クーラーの冷たい風が俺に当たる。

毛布を掛けてくれてたけど、寝てる間に蹴っちゃったみたい。

動けないから、どうしよう。

とりあえず、ぎゃあぎゃあ泣く。

これで、ちょっとはあたたかくなれる。

ママが抱っこしてくれるかもしれないし。

……………あれ？ ママもパパも寝てるよ。起きてくれないよ。

しばらく泣いてたけど、もう疲れちゃった。

あれ？ あたたかくなならないよ。

部屋が冷たいよ。

あれれ？ 動けなくなってきた。

全然あたたかくなならないよ。

あれれれ？

なんだか、ぼんやりしてきた。

あれれれれ？ あれれれれれ？

俺、このままずっと眠っちゃうみたい。

☆☆☆☆☆☆

「どうだい？ 君がどうなったか、これでわかっただろ？」

「ああ、わかったよ」

「寒さで体温を奪われ、呼吸に必要な糖分を消費してしまった。故に、君は呼吸をする事ができなくなり、そのまま眠ってしまったわけだ」

「そうだったんだ」

「君は自分の事を知った。それで、どうだった？」

「短かったけど、よかったんじゃないかな。最期は、みんなが傍にいてくれたみたいだし」

「君が満足なら、なにも言う事はないよ。それで、君はどうする？」

「ここにいてもしょうがないんだよね。だったら、俺は先に進むよ」

「そうかい。なら進むといい」

そうして、俺は次の一步を踏み出した。この先になにかがある事を信じて。

F i n o .

## 星のその先へ

<http://p.booklog.jp/book/74547>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74547>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74547>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ